

## IV. 教育学からのアプローチ

### 新たな宇宙時代到来に向けた道德教育における課題

岩田 陽子<sup>※</sup>

Issues in moral education for the new space era

by

Yohko Iwata(JAXA)

**Abstract:** The mental attitudes of human beings as human beings and values such as discipline, etc. that should be complied with are fostered in school education, particularly centred on “moral education.” When fostering these kinds of values, how far can the values advocated in current moral education be applied in the new space era in which there is a high likelihood of a change in the perceptions of we human beings occurring, for example the discovery of extraterrestrial life, etc.?

In this paper, we addressed these problems by examining issues in moral education for the new space era based on the current “Curriculum guidelines”.

The results of this examination revealed that it is necessary to add the following two points to the moral education aimed for by the current “Curriculum guidelines”, in order to form the values required for the new space era.

The first point is that it is necessary to have education that first recognizes that culture, the human race, etc. “are diverse” and then fosters the “unitary thinking (which says that although there are a variety of ideas the conclusion we should all be working toward is the same, or comes down to the same thing in the end)” that liminates the contradictions and conflicts that arise from that diversity.

The second point is that in order to foster these kinds of values it is necessary to devise strategies for mastering specific abilities and skills such as the “ability to adapt” to diversity and “the ability to constructively and critically examine” the cultures and values of many countries as matters that concern oneself rather than as matters that are only the concern of other people, etc.

Taking into account these kinds of issues, it is necessary for education to go beyond merely stimulating interest in and providing information about space, to aim for space education which leads to the formation of values like the above. We believe that going forward it will be necessary to examine how space education should be specifically developed, practice it, and return the results of the verification to school education.

**keywords:** 宇宙教育, 道德教育, 価値観形成, 帰一, 多様, 宇宙時代, 学習指導要領

#### 概要

学校教育では特に「道德教育」を中心に人間としての心構えや守るべき規律などの価値観が醸成される。こうした価値観醸成にあたり、例えば地球以外の場所に生命が発見されるなど、我々人間の意識変化が生ずる可能性が高い新たな宇宙時代において、現行の道德教育で

<sup>※</sup> 独立行政法人宇宙航空研究開発機構 大学等連携推進室 人文・社会科学コーディネータ  
(東北大学大学院教育学研究科博士後期課程在籍中)

提唱している価値観がどこまで通用し得るであろうか。

本論文では、こうした問題に対し、現行の『学習指導要領』をベースに新たな宇宙時代に向けた道德教育における課題を検討することとした。

検討の結果、新たな宇宙時代に向けて求められる価値観形成として、現行の『学習指導要領』がめざす道德教育に次の2点が付加される必要があることが明らかになった。

まず1点目は、文化や人種などが「多様である」ことを認めたとうえで、そうした多様さ故に生ずる矛盾や衝突を取り除く「帰一的な(色々な考えがあるもののめざすべき結論は同じ、帰一するという)考え方」を醸成する教育が必要であるという点である。

次に、こうした価値観醸成には、多様性への「適応能力」や、多国の文化や価値観を他人事ではなく自分事として「建設的かつ批判的に検討する力」など、具体的な能力やスキルを身に付けさせる工夫が必要となるという点である。

こうした課題を踏まえ、教育のあり方として、単に宇宙に関する興味関心の喚起や知識提供で留めるのではなく、上記のような価値観形成につながる宇宙教育をめざす必要がある。今後、具体的にどのように展開すべきかを検討・実践し、検証結果を学校教育へ還元する必要があると考えている。

## 1. はじめに

2011年現在、気象衛星やGPSなど宇宙空間を利用した技術が欠かせない世の中になっているにもかかわらず、我々人間にとって「宇宙」または「宇宙空間」は未知の領域であり、また日常生活のなかでは「非現実」的な領域であるといえる。

一方で、この先50年、100年という長期スパンで見た場合には、一般の民間人が気軽に宇宙旅行に行ける時代の到来、さらにはどこかの国あるいは何かの集団が、独自に宇宙へ進出し、宇宙基地などを建設する可能性も否定できず、宇宙空間が我々人間にとって現実空間になることが予想される。

こうした宇宙時代を見据え、学校教育の中で具体的にどのような価値教育をしていくべきかということをも本論文のテーマとした。特に宇宙時代の到来で生ずるであろう「価値」として、コスモポリタンの意識、つまり、一つの国や民族にとらわれず、全世界を自国として考え行動する意識<sup>1</sup>が掲げられる。全世界の人間が、国や民族という枠を取り払い、地球全体を自国として捉え行動したとき、また、それを「是」とした「価値」が浸透したときにどのようなことが生ずるのか。このようなことを想定したときに、宗教哲学の立場からいけば「帰一性」という考えが、文化人類学の立場からいけば「多様性」という考えが掲げられた。具体的には2011年6月7日に開催された第28回ISTS(International Symposium on Space Technology and Science: 宇宙技術および科学の国際シンポジウム)での人文・社会科学的研究における学術セッションの場で次の通り発表された。

京都大学こころの未来研究センター教授、鎌田東二先生は、宗教哲学の立場から見た場合、新たな宇宙時代に向けた宗教的役割として「帰一性」があると述べた。我が神も他の神も結果的に同一のものにたどり着くという意味合いであり、特に日本は、神道のようにたくさんの神の存在を受け容れられる文化があることから、日本人が「帰一性」に貢献する役割を担うのに適当なのではないかと主張した。

一方で、神戸大学大学院国際文化学研究科教授、岡田浩樹先生は、文化人類学的に見れば、帰一的な動きは一步間違えると「均質化」につながり、「多様性」が失われると主張した。さらに帰一をめざそうとしてもそれは難しいのではないかと述べた。具体的には、本来は同じ民族であるにもかかわらず起こり得る民族紛争は、結果的に帰一には至らないことの典型であるとした。さらに我々人類というのは、動物が数世代、数十世代かけて体を変えて、さらに様々な本能のプログラムを変えて環境に適応してきたのに対し、文化を変えることで適応してきたと述べ、人類にとって文化の多様性は生き残り戦略であると主張した。

なお、鎌田先生は宗教哲学者の立場から見れば、例えば、神道というのは八百万の神様がいるわけで、多様性を象徴するような宗教文化であり、逆に、多様であることが求められていると述べた。しかし、多様性を束ねていくような何かをもっているのが神道であり、多様性を担保しながらもどうやって新しい秩序を構築していくか、これが重要なのではないかと述べた。

こうした背景を踏まえ、新たな宇宙時代の幕開けに際し、「帰一性」という考え方、「多様

性」という考え方をどのように捉えていけばよいのか。また、特に学校教育においてどのような価値教育をしていけばよいかということを検討することとした。

なお、日本における価値教育としては主に小学校における「道徳教育」が挙げられる。具体的に「道徳教育」について「教育基本法」には次の通り記載されている<sup>2</sup>。

(教育の目標)

第2条 教育は、その目的を実現するため、学問の自由を尊重しつつ、次に掲げる目標を達成するよう行われるものとする。

一 幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと。

さらに『学習指導要領』では道徳教育について次の通り目標を掲げている<sup>3</sup>。

道徳教育の目標は、第1章総則の第1の2に示すところにより、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。

道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、特別活動及び総合的な学習の時間における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする。

上記に掲げられている「道徳性」についてより具体的に理解するために、小学校『学習指導要領解説 道徳編<sup>4</sup>』を見ていくこととする。

解説によれば、「道徳性とは、人間としての本来的な在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものである。それはまた、人間らしいよさであり、道徳的諸価値が一人一人の内面において統合されたものといえる<sup>5</sup>と説明されている。さらに、ここでいう「道徳的行為」および「道徳的諸価値」とは、「すべての生命のつながりを自覚すること」「すべての人間や生命あるものを尊重し、大切にしようとする心」「向上心」「思いやり」「公德心」という言葉で説明されている<sup>6</sup>。

さらに、この道徳性は、「生まれたときから身に付いているものではない<sup>7</sup>とし、「道徳性の萌芽をもって生まれてくる」としている。さらに、「人間社会における様々な体験を通して学び、開花させ、固有のものを形成していくのである」と説明し、「道徳性の発達には、様々な要素がかかわり合っている」と説明されている。具体的には、次の要素がかかわり合うことで段階的に発達するものとされている。

- ・よりよく生きる力の自覚
- ・自分自身、他の人、自然や崇高なもの及び集団や社会との日常生活におけるかかわり

## ・ 道徳的価値の自覚

まず、人間は幼児期から快・不快の感情が認識でき、それを基準に「行ってよいことと悪いこと」に気づく、この基準が成長につれ理性や内省する力などが加わることで自らよりよく生きる力を伸ばすことにつながると説明している。

次に、道徳性を発展させる主なかかわりは、自分自身、他の人、自然や崇高なるもの及び集団や社会であり、これらとのかかわりを豊かにもてる体験を充実させることで道徳性が発達すると説明している。

最後に、道徳性の発達には、他律から自律へ方向をとるとしている。具体的には、結果を重視する見方から動機をも重視する見方へ、主観的な見方から客観性を重視した見方へ、一面的な見方から多面的な見方へと発展するとしている。また、このような道徳性の発達は、自分自身を見つめる能力、相手のことを考える能力や相手のことを思う能力、さらには感性や情操の発達、社会的な経験や実行能力、社会的な期待や役割の自覚などとも大いに関係するとし、こうした道徳的価値の自覚を深めていくことが道徳性を発達させると説明している。なお、具体的に『学習指導要領』にて小学校1～6年で掲げている具体的な教育目標を、表1<sup>8</sup>のとおり掲げている。

新たな宇宙時代の幕開けに際し、こうした道徳教育の考え方とどのような点で合致し、どのような相違があるのか、また、宇宙時代を意識した場合、現状の道徳教育にどのような課題が想定されるのか。まず、現状の道徳教育における課題を整理し、その課題に対し、宇宙時代を想定した場合にどのような問題が想定されるかを検討したい。

第1学年及び第2学年		第3学年及び第4学年		第5学年及び第6学年	
1. 主として自分自身に関すること	<p>(1)健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしない、規則正しい生活をする。</p> <p>(2)自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。</p> <p>(3)よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。</p> <p>(4)うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。</p>	<p>(1)自分でできることは自分でやり、節度のある生活をする。</p> <p>(2)よく考えて行動し、過ちは素直に改める。</p> <p>(3)自分でやるとうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。</p> <p>(4)正しいと思うことは、勇気をもって行う。</p> <p>(5)正直に、明るい心で元氣よく生活する。</p>	<p>(1)生活を振り返り、節度を守り節制に心掛ける。</p> <p>(2)より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。</p> <p>(3)自由を大切に、希望と勇気をもってくじけないで努力する。</p> <p>(4)誠実に、明るい心で楽しく生活する。</p> <p>(5)真理を大切に、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。</p> <p>(6)自分の特徴を知って、悪い所を積極的に伸ばす。</p>		
2. 主として他の人とのかかわりに関すること	<p>(1)気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。</p> <p>(2)身近にいる幼い人や高齢者に温かい心で接し、親切にする。</p> <p>(3)友達と仲よくし、助け合う。</p> <p>(4)日ごろ世話になっっている人々に感謝する。</p>	<p>(1)礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。</p> <p>(2)相手のことを思いやり、親切にする。</p> <p>(3)友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。</p> <p>(4)生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。</p>	<p>(1)時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。</p> <p>(2)だれに対しても思いやりやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。</p> <p>(3)互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。</p> <p>(4)謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすること。</p> <p>(5)日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それこたえる。</p>		
3. 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること	<p>(1)身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。</p> <p>(2)生きること喜び、生命を大切にすることを。</p> <p>(3)美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。</p>	<p>(1)自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすること。</p> <p>(2)生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすること。</p> <p>(3)美しいものや気高いものに感動する心をもつ。</p>	<p>(1)自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。</p> <p>(2)生命がかげがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重すること。</p> <p>(3)美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。</p>		
4. 主として集団や社会のかかわりに関すること	<p>(1)みんなが使う物を大切に、約束やきまりを守る。</p> <p>(2)父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。</p> <p>(3)先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。</p> <p>(4)郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。</p>	<p>(1)約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。</p> <p>(2)働くことの大切さを知り、進んで働く。</p> <p>(3)父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合って楽しい家庭をつくる。</p> <p>(4)先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合って楽しい学級をつくる。</p> <p>(5)郷土の文化と伝統を大切に、郷土を愛する心をもつ。</p> <p>(6)我が国の文化と伝統に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもち、外国の人々や文化を大切にすること。</p>	<p>(1)身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。</p> <p>(2)公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切に、進んで義務を果たす。</p> <p>(3)だれに対しても差別することなく公正、公平にし、正義の実現に努める。</p> <p>(4)働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。</p> <p>(5)父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。</p> <p>(6)先生や学校の人々への敬愛を深め、みんな協力し合いよりよい校風をつくる。</p> <p>(7)郷土や我が国の文化と伝統を大切に、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。</p> <p>(8)外国の人々や文化を大切にすること、日本人としての自覚をもつて世界の人々と親善に努める。</p>		

表1：学習指導要領 道徳「内容」9

## 2. 『学習指導要領』に見る現代の道徳教育における新たな宇宙時代に向けた課題

1 で見た通り，学校で行われる道徳教育は，「人間として」「人間らしさ」ということを前提としている．さらに「人間として」「人間らしさ」として，人間は「よりよい生き方を目指す」ものだとしている点も特徴である．ここでいう「よりよい生き方」とは，『学習指導要領』的に見れば「善悪の区別がつけられる，人を思いやる気持ちや向上心をもって生きる生き方」と整理できる．さらに「人間としてのよりよい生き方」という内容への理解を深めるために，『学習指導要領』にて小学校1～6年で掲げている具体的な教育目標を見ていくこととする（表1）．

表1を見ると，道徳教育の目標は，横軸の4つ「自分」「他の人」「自然や崇高なもの」「集団や社会とのかかわり」を軸とし，2学年ごとに段階的に目標が深化している．小学校6年間における道徳教育がめざす最終的な姿である第5学年及び第6学年の目標を中心に検討を進めていくこととする．具体的には，横軸の「①自分」「②他の人」「③自然や崇高なもの」「④集団や社会とのかかわり」の各教育目標に関し，新たな宇宙時代を想定したときにどのような点を検討すべきかを洗い出すこととする．

### ①「自分」

- |   |
|---|
| <p>(1)生活を振り返り，節度を守り節制に心掛ける．</p> <p>(2)より高い目標を立て，希望と勇気をもってくじけないで努力する．</p> <p>(3)自由を大切にし，規律ある行動をする．</p> <p>(4)誠実に，明るい心で楽しく生活する．</p> <p>(5)真理を大切にし，進んで新しいものを求め，工夫して生活をよりよくする．</p> <p>(6)自分の特徴を知って，悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす．</p> |
|---|

上記項目に関し，新たな宇宙時代を想定したときに次の点の検討が必要であると考える．

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・節度や節制については「度を越さない」ということで共通するが，「度」の基準はその時代の文化や経済的背景が大きく反映されることが想定される．それでは宇宙時代においてはどのような「基準」が求められるのであろうか．</li> <li>・「自由を大切にし」つつも「規律ある行動」を求めており，矛盾に満ちた目標である．実際には「自由」と「規律」とのバランス感が求められることが想定されるが，この点についても，やはりその時代の文化や経済的背景が大きく反映されることが想定される．それではこのバランス感について宇宙時代にはどのように捉え得るのであろうか．</li> <li>・「真理を大切にし」つつも「進んで新しいものを求め」としているが，宇宙のように未知な領域における「真理」，そして宇宙のように常に新しいニュースが更新される状況での「新しいもの」をどのように「工夫」し，「生活」に反映させ得るのであろうか．</li> </ul> |
|--|

## ②「他の人」

- (1)時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。
- (2)だれに対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立って親切にする。
- (3)互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。
- (4)謙虚な心を持ち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする。
- (5)日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

上記項目に関し、新たな宇宙時代を想定したときに次の点の検討が必要であると考える。

- ・今の地球における「時と場」の考え方と、宇宙全体を捉えたうえでの時と場の考え方とは大きく異なる。宇宙時代において、「時と場をわきまえ」ということがどのようなことであるのか。
- ・宇宙時代に向けて、「だれに対しても思いやりの心」をもつことが可能なのであろうか。宇宙のように未知でリスクの伴うものを目の前にしたときに、「だれに対しても思いやりの心」をもった結果、全員が危険な状態に陥ることも想定される。こうした場合、道徳的にはどのように判断すべきなのであろうか。
- ・「謙虚な心」は宇宙時代にどのように反映されるか、また、「自分と異なる意見や立場を大切にする」ことが宇宙時代にどのように影響するのであろうか。

## ③「自然や崇高なもの」

- (1)自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。
- (2)生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。
- (3)美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。

上記項目に関し、新たな宇宙時代を想定したときに次の点の検討が必要であると考える。

- ・「自然の偉大さ」、「自然環境」、これに「宇宙」も加えた場合、どのような影響があるであろうか、この点を検討しなければならない。
- ・今は地球上の「生命」を中心にしているが、宇宙時代に新たな「生命」（知的生命と限らずとも微生物や植物など地球上に属さない生命）が発見される可能性が高まる中、これまで出会ったこともない「生命」をどのように捉えていくべきであろうか。
- ・宇宙に関してはほぼすべてが「人間の力を超えたもの」である可能性が高い。こうした宇宙に「畏敬の念をもつ」ことが、どのようなことにつながるであろうか。



#### ④「集団や社会とのかかわり」

- (1)身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。
- (2)公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。
- (3)だれに対しても差別することや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。
- (4)働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。
- (5)父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。
- (6)先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。
- (7)郷土や我が国の文化と伝統を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。
- (8)外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。

上記項目に関し、新たな宇宙時代を想定したときに次の点の検討が必要であると考える。

- ・「身近な集団に進んで参加」ということは、宇宙時代においてはどのようなことであるといえるのであろうか。また宇宙時代における「自分の役割」というものとしてどのようなことが想定されるのであろうか。
- ・宇宙時代における「自他の権利」とはどのようなものであるのか。
- ・「正義の実現」でいう「正義」とは何か。今の時代における「正義」と宇宙時代における「正義」とが共有できるものであるのか。
- ・宇宙時代において「郷土や国を愛する心をもつ」ということ、さらには「日本人としての自覚」ということと、「外国の人々や文化を大切にする」「世界の人々と親善に努める」ということとをどのように共存させ得るのであろうか。

以上、「①自分」「②他の人」「③自然や崇高なもの」「④集団や社会とのかかわり」の観点から、新たな宇宙時代に検討すべき課題を掲げた。

これらの課題を踏まえ、改めて、新たな宇宙時代における「道德教育」を考えるうえで、検討すべき項目を次ページで整理する。

**①「未知なる宇宙」に関する検討**

- ・宇宙のように未知な領域における「真理」と次々に更新される「ニュース」への対処
- ・「自然環境」「自然の偉大さ」に「宇宙」が含まれることによる影響
- ・地球外の「生命」への対処
- ・「人間の力を超えたもの」「宇宙」に畏敬の念をもつことの意味

**②「基準」に関する検討**

- ・「度を越さない」というときの「度」「自由」と、「規律」を両立させ得るバランス感、「正義」「思いやりの心」「謙虚な心」などを規定する「基準」の検討
- ・「自他の権利」や「自分の役割」を規定する「基準」の検討

**③「愛国心」と「多様性（ダイバーシティ）」に関する検討**

- ・宇宙時代に「郷土や国を愛する心をもつ」「日本人としての自覚をもつ」ことの意味
- ・「外国の人々や文化を大切にする」「世界の人々と親善に努める」ことの意味

以上、『学習指導要領』に掲げられる道德教育がめざす姿に対し、新たな宇宙時代に想定される課題を整理した。

次章より、上記3点について検討を進め、新たな宇宙時代に向けてどのような課題が想定されるか検討していくこととする。

### 3. 新たな宇宙時代を意識した検討

前章で大きく3つに整理した検討事項について、新たな宇宙時代にどのようなことが考え得るのか検討を進めることとする。

その前に、そもそも新たな宇宙時代がどのような時代であるかについて整理しておく。

2011年現在、宇宙は思った以上に身近なものとなっている。1957年に人類初の人工衛星スプートニク1号（旧ソ連）が打ち上げられてから54年が経過し、もはや我々の暮らしに人工衛星は欠かせなくなっている。最も身近なものでいえば気象衛星であり、宇宙から絶え間なく雲や地表などの温度分布を観測することで、天気予報ができるようになってきている。技術の進展に伴い、天気予報の精度は高まっており、我々の日常生活だけでなく、船舶や航空機の安全な航行のために役立っている。

また1961年に旧ソ連のガガーリンが人類初の有人宇宙飛行を成功させてから50年が経過し、今では高度約400kmに位置するISS（国際宇宙ステーション）で長期滞在もできるようになり、人が宇宙に行くことに大きな驚きを感じない時代となった。しかしながらほんの50年前は人が宇宙に行くなど想定もできなかった時代であり、人が宇宙に行くことが当たり前になった今に至る過去50年で我々人類には大きな意識変革があったといえる。

冒頭に紹介した2011年6月7日に開催した沖縄での人文・社会科学研究における学術セッションで、ジャーナリストの立花隆氏を迎えてパネルディスカッションを開催した。このとき、立花氏は次のような趣旨で50年前に起きた意識変革について語った。

人類が宇宙進出を果たしたとき、我々人類は大きな意識変化を体験した。その意識変化とは、「青い地球の姿」を宇宙から見たことに拠るものである。今から50年前の1961年、旧ソ連のガガーリンが人類で初めて地球の外に出た。宇宙から地球を見て「地球は青かった」と言った。この「地球は青い」ということの意味を、その当時はだれもが理解できなかった。今の地球儀は青いが、私の時代の地球が土色であったように。

そしてその後、宇宙飛行士の発言やメディアを通じた地球の映像により、我々は当たり前のように「青い地球の姿」を共有した。この「青い地球の姿」を共有したこと、これがあの終わらないであろう米ソの冷戦を終結させた。我々の時代の人間は、あの冷戦は絶対に終わらないであろうと考えていた。しかし、宇宙飛行士が「宇宙から地球を見ると国境線はない」「地球は一つである」と実感し、我々に伝えたことにより、あの冷戦を終わらせたのである。「青い地球の姿」、これが人類にとっての共通体験となり、これが人類の宇宙進出における初めての意識変化となったのである。

この立花氏の語りは、彼の著書である『宇宙からの帰還』に記述されている宇宙飛行士の言葉に基づくものである。立花氏の言葉をより理解するために、具体的に幾つか挙げてみることにする。

**・アポロ 15 号「ジム・アウイン」の言葉<sup>10</sup>**

宇宙飛行士たちは、それぞれに独特の体験をしたから、独特の精神的インパクトを受けた。共通していえることは、すべての人がより広い視野のもとに世界を見るようになり、新しいビジョンを獲得したということだ。私はミサイルの専門家だったが、いまの超大国の軍事的対立をとて悲しいことだと思ふようになった。ソ連の脅威というが、ソ連もアメリカの脅威を感じている。お互いに脅威を与えあうというこの関係の底にあるのは、結局のところ観念的対立なのだ。目的を異にする観念体系をお互いに持っているというだけで、世界中の不幸な人々を全部救済してあまりあるような巨額な資金を投じて、お互いを殺し合う準備を無限に積み重ねているというこの現状は悲しむべきことだ。（中略）人間はみな同じ地球人なんだ。国がちがいで、種族がちがいで、肌の色がちがいでいようと、みな同じ地球人なんだ。最低限度これだけは知ってもらいたいね。

**・アポロ 7 号「ドン・アイズリ」の言葉<sup>11</sup>**

眼下に地球を見ているとね、いま現に、このどこかで人間と人間が領土や、イデオロギーのために血を流し合っているというのが、ほんとに信じられないくらいバカげていると思えてくる。いや、ほんとにバカげている。声をたてて笑い出したくなるほどそれはバカなことなんだ。

**・アポロ 7 号「ウォーリー・シラー」の言葉<sup>12</sup>**

宇宙から見ると国境なんてどこにもない。国境なんてものは、人間が政治的理由だけで勝手に作りだしただけの、もともとは存在しないものなのだ。宇宙から自然のままの地球を見ていると、国境というものがいかに不自然で人為的なものであるかがよくわかる。それなのに、それをはきんで、民族同士が対立し合い、戦火をまじえ、殺し合う。これは悲しくもバカげたことだ。私は軍人として生きてきた人間だから（朝鮮戦争を現に戦った）、どの戦争においても、戦争には戦争にいたる政治的歴史的な理由があり、そうそう簡単には戦争がない時代がこの地球に訪れそうにないことはわかっている。しかし、その認識があってもなおかつ、宇宙からこの美しい地球を眺めていると、そこで地球人同士が相争い、相戦い合っているということが、なんとも悲しいことに思えてくるのだ。どんなに戦っても、お互い誰もこの地球の外に出ていくことはできない。

**・アポロ 10 号・17 号「ジーン・サーナン」の言葉<sup>13</sup>**

第一に、宇宙に出ると、地球上での国家間の対立抗争がいかにバカげているかという認識が生まれる。そして第二に、宇宙環境の厳しさが、宇宙に進出した人間同士を相互依存させる方向に働き、宇宙では殺し合いより助け合いのほうが必要だということがすぐにわかるからだ。

このように宇宙に行った宇宙飛行士、さらには月にまで行って丸い地球を見た宇宙飛行士の多くに「地球は一つ」「宇宙から見れば国境線はない」という意識が芽生えている。我々人類で月にまで行って丸い地球を見た人間は24人、さらに月に降りたことのある人間は12人しかいない。こうした体験をもつ彼らの言葉は重い。さらには今では地球の映像を見ることができるようになったことが加わり、我々人類は「地球は一つ」「宇宙から見れば国境線はない」という共通意識が芽生えたのだと立花氏は述べた。

そして、立花氏は沖縄の地でさらに次のような趣旨で話を続けた。

今、また次の意識変化が起きようとしている。それはケプラー宇宙望遠鏡のような精度の高い望遠鏡が、地球以外に属する生命体を発見する可能性が高まったからである。我々人間はこの広い宇宙の中で孤独な存在ではなく、他に生命があるということを見つける可能性が出てきた。もちろんすぐに見つかるわけではないが、もし地球以外の他の場所に生命があるということが見つければ、それは人間にとって大きな意識変化をもたらすであろう。

立花氏の主張は、この先、「地球以外の場所に生命が発見される」ことにより、「地球は一つ」「宇宙から見れば国境線はない」ということにも変わる大きな意識変革をもたらすということである。

実際に、地球以外の場所に生命が発見されるとしたらどのような意識変革をもたらすのであろうか。この点について前章で掲げた「①『未知なる宇宙』に関する検討」という観点で考えていくこととする。

## ①「未知なる宇宙」に関する検討

- ・宇宙のように未知な領域における「真理」と次々に更新される「ニュース」への対処
- ・「自然環境」「自然の偉大さ」に「宇宙」が含まれることによる影響
- ・地球外の「生命」への対処
- ・「人間の力を超えたもの」「宇宙」に畏敬の念をもつことの意味

この点に関しては、未だ発見されていない以上、SFでの検討しか想定ができない。しかし、SFが人間に「驚き」や「恐れ」などの感情を起こさせる内容であることを考えれば、新たな宇宙時代が人間にどのような意識変革をもたらすのかという参考にはなる。そこで、過去のSF作品（主に映画）を取り上げ、地球外生命に遭遇した人間の感情や行動を幾つか掲げてみることにする。

ここではアメリカ映画協会が2008年に発表したSF映画トップ10<sup>14</sup>のうち上位3位までの作品を参考に、そこで描かれる描写を検証することとする。

- 1位：2001: A SPACE ODYSSEY  
（『2001年宇宙の旅』1968年）
- 2位：STAR WARS: EPISODE IV - A NEW HOPE  
（『スターウォーズ エピソードIV』1977年）
- 3位：E. T. - THE EXTRA TERRESTRIAL  
（『E. T.』1982年）

まず、『2001年宇宙の旅』は、宇宙映画としては最も古く最も定番といえる映画であり、この映画で描写された地球外生命に遭遇した人間の感情や行動は、その後に大きな影響を与えたことが考えられる。

モノリスという地球外知的生命体の道具を発見したことから始まるが、描写としては、我々地球人が他の惑星の何者かからの挑戦を受けた初めての出来事として描かれ、その脅威や恐怖について描写されている。つまり、人間にとって、地球外知的生命は「脅威」であり「恐怖」であるという想像があったといえる。

『スターウォーズ エピソードIV』は、宇宙上で繰り広げられる帝国軍と反乱軍の戦いがメインのストーリーであり、地球外生命については基本的に「既に存在するもの」として描かれている点が特徴的である。従って、どのような容姿の生命に出会っても、人間は大きな驚きや感情を見せることはない。スターウォーズで着目とするならば、地球外生命の描き方である。人間とは異なる容姿で描かれているが、大方が2本足で歩いたり、両手があったりと、体の仕様は人間をベースに描かれている。つまり、地球外生命についての想像としては、人間のような仕様、機能をもちつつ「容姿が異なる」という想像であったといえる。

最後に『E. T.』では、最初に出会ったのが子どもであったという点が特徴的である。地

球外生命に出会った「驚き」はあるものの、すぐに受け容れられる過程が描かれている。一方、大人は地球外生命を隔離する、確保するなどの行動が描写されており、「脅威」や「恐怖」が描かれている。

こうしたSF映画の影響により、我々人間は地球外生命について「違う容姿をしている」「怖い」「攻めてくる」というような意識をもつようになったといえる。

あくまでもSFでの話ではあるが、実際に人間がこれまでに見たこともない生命、さらには何をしてくるかわからない生命に出会ったら、やはり脅威や恐怖を感じるであろう。こうしたことが現実化したら、確かに立花氏が言うように我々「人間にとって大きな意識変化をもたらす」のであろう。

こうしたことを踏まえ改めて道德教育を考えるうえでの検討すべき項目を見てみる。

例えば、新たな宇宙時代は、これまでの真理が真理ではなくなり、次々と新しい真理が発見される可能性、地球外の「生命」が発見される可能性が否定できない時代となる。なぜなら、NASAのケプラー衛星によりこれまで発見されてこなかった太陽系外惑星が、発見されるようになり、我々太陽系の構造が常識ではなくなってきたことが既に明らかになっているからである。例えば、系外惑星探査を研究している田村は次の通りその驚きを述べている<sup>15</sup>。

いきなり木星クラスの系外惑星が見つかって、しかも、それが周期がたった4日しかなかったんですね。これは、天文学、惑星科学、あるいは地球科学をやっている人にとって大問題だったんです。それまでの惑星太陽系の中にしかサンプルがなかったから、すべて太陽系を基準に考えていた。それがひっくり返されました。それこそ、天動説から地動説、っていうのと同じ感じで。"世の中"には、たくさん星があって、その周りには太陽系とは違ったタイプの惑星があるんだと、世界観が変わったわけですよ。

このように、これまでの常識が覆されるような、例えば、地球外の「生命」が発見される可能性が否定できない以上、「どのような事実も受け容れる」「どのような異質なものを、常識では考え難いとされるものも受け容れる」心構えが求められる。

また、「人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ」とされているが、「宇宙」も「人間の力を超えたもの」である以上、畏敬の念をもつことになる。そうしたものに畏敬の念をもつことは重要であろうことは想像がつくが、それが前述した新しい真理の発見、地球外生命の発見が現実化するかもしれない新たな宇宙時代にも持続できるものであろうか。我々人間は、これまで見たことも感じたことも出会ったこともない未知に対し、きちんと受け容れ、畏敬の念を抱けるのであろうか。さらにいえば、そうした新たな宇宙時代に向けて、畏敬の念を持続させるためにはどのようにすればよいのであろうか。

この点についてはこの後の項目を検討する中で模索していきたいと考えている。

## ②「基準」に関する検討

- ・「度を越さない」というときの「度」「自由」と、「規律」を両立させ得るバランス感、「正義」「思いやりの心」「謙虚な心」などを規定する「基準」の検討
- ・「自他の権利」や「自分の役割」を規定する「基準」の検討

①では「人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ」ことの重要性に触れ、しかしそれが新しい真理の発見、地球外生命の発見が現実化するかもしれない新たな宇宙時代にも持続できるものであろうか。逆に持続させるためにはどのようにすればよいのであろうかということについて疑問を掲げた。

②では、その疑問の延長として、そもそもそうした畏敬の念をもつ対象の基準はどのように設定されるものであるのか、また、新しいものを受け容れるときの基準などについてどのような問題が想定されるのかを検討していくこととする。

まず、そもそも現代の道德教育における目標がどのような「基準」に規定されたものであるのか、特にどのような社会背景に基づいて規定されたものであるのかを見ていくこととする。具体的には、小学校の『学習指導要領』は2009年に改訂され、全面施行は2011年4月1日からであったが、その改訂の経緯や改訂後に示された『学習指導要領』の解説集<sup>16</sup>を基に分析する。

解説集『道德編』に拠れば、児童を取りまく社会の変化として「社会全体のモラルの低下への対処」が掲げられている<sup>17</sup>。特に児童の道德性の育成に大きな影響を与えている社会的風潮として次の4つを掲げている。

- (a)社会全体や他人のことを考えず、専ら個人の利害損得を優先させる。
- (b)他者への責任転嫁など、責任感が欠如している。
- (c)物や金等の物質的な価値や快楽が優先される。
- (d)夢や目標に向けた努力、特に社会をよりよくしていこうとする真摯な努力が軽視される。
- (e)じっくりと取り組むことなどのゆとりの大切さを忘れ、目先の利便性や効率性を重視する。

このような社会的風潮を想定し設定された「基準」であるとするならば、新たな宇宙時代における「基準」はどうであろうか。仮に上記の教育が継続され、最大限に効果が発揮された場合、次のような傾向になることが想定される。

- (A)個人の利害損得よりも社会全体や他人のことを優先させる。
- (B)すべての責任は自分にあるなど、責任感が強い。
- (C)物や金等の物質的な価値や快楽よりも、家族との愛情や人との結びつきなど心の豊かさが優先される。



- (D)夢や目標に向けた努力，特に社会をよりよくしていこうと真摯に努力する。  
 (E)目先の利便性や効率性よりも，じっくり取り組むなど長期的な内容を重視する。

上記のような傾向に向かった場合，新たな宇宙時代として「基準」としてどうなることが想定されるであろうか。まず，道德教育の学習成果として上記のことは見る限り，極めて優等生的な人間に仕上がるということが見て取れる。ここでいう優等生的というのは，今の日本がめざす教育の理想的な姿といえるであろうが，こうした優等生的な人間は新たな宇宙時代にどのように対応し得るであろうか。

例えば，①で整理した通り，我々人間が仮に「容姿が異なる宇宙人」を目の当たりにしたとき，人間が創作したSFの世界では脅威や恐怖が描かれており，実際にそうであろうと推測し得る。しかし，こうした宇宙人に対し，ここでいう「他人」という枠に当てはめることができるであろうか。つまり，こうした宇宙人に対しても自分よりも優先して対応し得るであろうか。また，宇宙進出が進み，民間人が宇宙旅行に行くような時代になった際，万が一，宇宙空間で危険な状況に陥ったときに，果たして他人を思いやる行動が実現し得るであろうか。もしくはこのようなときの「正義」とは，どのような「基準」で行動することが「正義」といえるのであろうか。

この検討をするうえで，「マジョリティ」と「マイノリティ」の考え方を参考にしたい。

「マジョリティ」とは一言でいえば「多数派」のことを指し，「マイノリティ」とは「少数派」のことを指す<sup>18</sup>。

我々は，この「マジョリティ」と「マイノリティ」があることを当然のように受け入れ生活をしている。同じ人間の中ですらマジョリティとマイノリティという立場が存在し，この立場の違いで「基準」の捉え方も変わってくる状況にある中，新たな宇宙時代においてどのような「基準」が生ずるのであろうか。例えば，①で見た通り，SFに描かれている「容姿が異なる宇宙人」を目の当たりにしたときの「脅威や恐怖」とは，我々人間が「マジョリティ」としての立場で，宇宙人を「マイノリティ」として見たときに生ずる感情であるといえる。こうした立場の違いが生ずる背景，またその影響について，精神療法学者のアルノ・グリーン<sup>19</sup>の文章を引用して考えてみたい。

現実の世界における人間的な価値の喪失にもはや耐えられない人々が，「狂っている」と見なされる一方で，人間の本質を放擲してしまった人々には，「正常性」の証明書が与えられている。そして，われわれが権力を委ね，われわれの生活と未来について決定させるのは後者の人々なのだ。彼らは現実に正しく近づく術を心得ていて，それを扱うことができるのだと誰しも信じている。しかし，「現実との関係」が，その人の精神的な病気，あるいは健康を確認する唯一の尺度なのではなく，どの程度まで，絶望のような人間の感情，共感のような人間の知覚，感激のような人間の体験が可能なのか，あるいはどの程度までそれらを失っているかということも問われなくてはならない。

これは精神病患者をマイノリティ、社会に適応し現実に生きること慣れてしまっている私たちをマジョリティとして捉えたときに、果たしてそれが人間の本質として適正といえるのかという問いかけであることが考えられる。つまり、私たちが常識であると思っていること、そしてそれに適応できる人を受け容れるとした場合、適応できない人はマイノリティとして取り扱われてしまうということになる。しかし、この点について精神科医である泉谷閑示氏は、「独裁体制の下で情報統制が敷かれたような国において、反体制的思想を持っていることを『精神の病』として不当に扱われたケースは、実際過去に数多く存在します」<sup>20</sup>と指摘している。

このように考えると、こうした正しさの「基準」を決定する社会に対し、「それが本当に正しいのか」を常に考えさせる仕組みが必要であることがわかる。つまり、マジョリティとして設定している基準は、本当に正しいのであろうか。マイノリティという立場から見た場合、その基準はどう見えるのであろうかという、双方の立場、観点から見た基準である工夫が必要なのではないだろうか。しかし、どのようにすればそうした工夫ができるのであろうか。

①で「畏敬の念」ということについて「持続させるためにはどのようにすればよいのであろうか」という疑問を発した。その持続させるうえで、畏敬の念をもつ対象を決定する「基準」や正義の「基準」など、我々は一歩間違えるとマジョリティの立場からの検討のみに終始してしまう危険性をもっていることに気がつかされる。つまり、「基準」を検討するにあたっては、マジョリティとマイノリティ双方の観点からの検討を常にできる社会の仕組みが必要であることが見えてきた。

それではそうした仕組みはどのようにすればできるのか。

次に、その解決策の一つとして「文化の多様性」について考えていくこととする。

文化人類学者によれば、「環境に適応するためには、多様な文化が存在していた方が有利である」<sup>21</sup>という。また、「様々な環境の変化に対し、人類は、極めて柔軟に異なる文化を創出して生存を図ってきたとされる」と説明されている。さらに、例えば、「例えば、およそ1万2千年前の氷河期終了に伴う環境変化に際して、人類は、旧石器時代の狩猟採集文化を脱し、定住集落、漁撈等の新技術、貯蔵習慣等の特徴を有する中石器時代の文化へ移行することにより生き延びた。だが、中石器時代のものとされる文化は、環境の激変に際して急に現れたものではなく、氷河期の時代から、少数ではあるが一部の温帯地域で既に存在していたことが明らかになっているという。つまり、多様な文化が共存していたからこそ、人類は、環境変化を乗り越えられたと考えられる。他と異なる文化を生み出し、多様性を維持することは、将来の状況の変化に適応し得る可能性を担保するという観点から見て、種としての人類の長期的な生存に必要なということになる」<sup>22</sup>という事例を挙げている。

マジョリティとマイノリティ双方の観点からの検討を常にできる社会の仕組みが必要であるという点に対し、環境に適応するために多様な文化が存在していた方が有利とする考え

方を用いて、次の通り整理することで解決の一つになるのではないであろうか。

まず、マジョリティとマイノリティという考え方自体はその社会の文化によって生ずるものである。例えば、この日本において日本人はマジョリティであるが、外国人はマイノリティであるとする風潮が拭い切れない。そもそも「外国人」という表現そのものがマイノリティの象徴であろう。

一方、多様な文化が存在していることにより人間はその環境に適応することができ、多様性があることにより進化し続けることができるとするならば、そもそも「日本人」と「外国人」という二つの文化が存在することを逆に歓迎することになる。つまり、マジョリティとマイノリティという考え方自体をなくすというよりは、こうした多様な立場、考え方があること、文化が多様であることを十分に認識、認められる社会づくりをすることが求められるのであろう。しかしながら、さらに重要なのは、過去の間人たちがそうしてきたように、様々な環境に適応できる能力を身に付けることにあるのではないか。

今、我々はすでに出来上がった文化の中で生活をしており、過去の間人たちに備わっていたような環境適応能力が不十分であるように感じる。実際に、文部科学省の「中央教育審議会 スポーツ・青少年分科会 青少年の体験活動の推進の在り方に関する部会」において、体験活動の乏しさに対する指摘、その結果、引き起こされる人格形成への影響などについて述べられており<sup>23</sup>、児童における環境適応能力が不十分であることに対する指摘が見られる。

こうした状況下、これまで以上の大きな変化が起こり得る新たな宇宙時代に、我々はどこまで適応できるであろうか。もしくはどのようにすることで適応し得るであろうか。

まず、適応するに当たって、多様な文化や価値観に対し十分な理解が求められる。その十分な理解の下で「基準」について規定していくことが重要であるといえる。しかしながら、既にこの点においては、道徳教育では多様性に関する理解も取り上げている他、学校教育の中では国際社会の理解など、多様な文化、立場への理解を促進させる教育が展開されている。例えば、文部科学省では国際理解教育として次の事例を紹介している<sup>24</sup>。

- 国際協力団体訪問と社会（公民的分野）
- 「青い目の人形」を探せプロジェクト-地域から見つめる過去と未来の国際親善-
- 地域にひろげよう異文化交流の輪
- 1年2組にルディ君がやってくる -世界に生きる人々の息吹を感じて-
- 身近な地域からひろげる「いのちのつながり」
- 黒潮文化圏を探れ「海流ビン放流」 -地域に潜む黒潮文化に触れ、国際性に気付く-
- ユニセフと学んだ女性学 -開発途上国の子どもたちと女性の生き方-
- アジアに届け！ 空飛ぶ車いす -車いすをバトンにボランティアリレー-
- 障害のある生徒とともに-
- NGO とつくる国際理解教育
- アジアで体験！アジアで発見！-アジアの人と大地に触れ「生き方」を学ぶ海外行事-

世界各国の文化について理解を深めるという観点だけでなく、障害のある方々への理解を深めるという観点まで、色々な立場、色々な文化があるということを理解しようという教育が展開されている。

我々、JAXAでもその一助として、「宇宙から見た地球の姿」を通じて、宇宙から見れば国境線はないということ、地球は一つであるということを展開し、国際社会理解、平和などへの教育を展開している。

つまり、今の道徳教育および学校教育の成果として、多様な文化や価値観を知ることについては期待できそうである。しかし、単に「知る」だけでは、実際にこうした多様な文化や価値観への適応能力の習得には不十分である。「理解」し、実際に「適応する」ことが求められる。そのためにはどのようにすればよいのか、この点については後ほど検討することとする。

### ③「愛国心」と「多様性（ダイバーシティ）」に関する検討

- ・宇宙時代に「郷土や国を愛する心をもつ」「日本人としての自覚をもつ」ことの意味
- ・「外国の人々や文化を大切に」「世界の人々と親善に努める」ことの意味

②で新たな宇宙時代に向けて「基準」をどう解釈していくか、その基準を決定する社会のあり方として、多様な文化や価値観を理解し、適応する能力をもつことの重要性を掲げた。

一方、道徳教育では「郷土や国を愛する心をもつ」「日本人として自覚をもつ」という愛国心なるものを掲げている。

多様な文化を理解し、その価値観を知り、それを認めるということと、日本人としての自覚をもち郷土や国を愛する心をもつということとはどのように共存し得るのであるだろうか。

つまり、愛国心を醸成するということは、自分の住んでいる日本に対し肯定的に受け入れ愛情をもつということである。一方、多様性に対する認識を醸成するということは、日本以外の文化や価値観について、肯定的に受け容れるということになる。自国に対する愛情をもちながら、他国の多様性に対しても寛容になる、これはどういうことを意味するであろうか。そもそも、そうしたことが可能であろうか。

日本の歴史を振り返れば、「愛国」ということについては教育勅語による影響が大きい。具体的には「忠君愛国」を基本精神にして教育が展開された<sup>25</sup>。儒教の教えに基づく「五倫五常」の実践を求め、かつ、戦争のときにはお国のために兵士として天皇を支えるという思想が求められた。逆にこれを果たせない青年は恥ずかしい青年と見なされ、親としても世間に対して面目が立たず、信用を失うことになったという。これが軍国主義下ではさらに進展し、「他国の国民よりも優れている」という過信を生み出し、「他国への侵略を正当化する行動へとつながった」という<sup>26</sup>。その後、敗戦を経験し、どのような道りを歩んできたかは我々がよく知るところであるが、「愛国」ということについて、一步間違えれば、このような「我が国が一番なり」という間違った方向に進む可能性も指摘されている。一方、今の日本人は愛国心の欠如が顕著となっており、そういう指摘をされてから道徳教育に、愛国心につながる目標を掲げたことも理解できる。

しかし、上記の通り、愛国心ということの取り扱いが難しいだけでなく、その方向性を「他国や多様性に対する寛容」まで認める方向での愛国心ということになると、具体的にどのようなすれば可能であるのか、『学習指導要領』だけを見てはその解決策は見出せない。

ここで再度検討すべき点が、冒頭に記述した「帰一性」と「多様性」の問題であると考えられる。再度、要点を整理すると次の通りである。

- ・「帰一性」という考え方への期待。色々な考えがあっても結論は同じところに行きつくという考え方。つまり、多様であっても結論は同じであり共有し得るという考え方。
- ・一方で、帰一的な動きは一步間違えると「均質化」につながり、「多様性」が失われるという考え方。結論は同じであるとして共有してしまうことで、思考が均質化してしまう危

険性をはらんでおり、そのことで結果として多様性が失われてしまうという考え方。また、「多様性」があるからこそ人類はその多様性に適応する形で進化してきており、多様性は重要であるという考え方。

①で見てきた新たな宇宙時代に対する我々に必要な心構え、②で見てきた「基準」を決定するのに必要な多様性への認識、一方で、愛国心の重要性、これを解決するうえで「帰一性」という考え方と「多様性」という考え方をどう共存させるのか。

この点について、明治時代に「帰一性」と「多様性」に関する教育運動を繰り広げた日本女子大学創設者である成瀬仁蔵の活動を参考にみていくこととする。

成瀬は1901年（明治34年）に、特定の宗教宗派によらない宗教的な学校として日本女子大学校を設立した<sup>27</sup>。

成瀬は「帰一教会の趣旨は私が以前から教育の根本主義としているところと全然同一である」と述べている<sup>28</sup>。当時の帰一教会は、内在的には、明治末期の日本において宗教信仰や道徳思想が安定せず、外在的には、東西の文明・思想が懸隔している現実を憂慮して、発足したものである。この成瀬に関する研究をした大森によれば、「成瀬の帰一運動は多様な宗教がそれぞれの特質を保ちながら、お互いに相一致協同した運動を目指すものであり、広くは、異なる人種・国民・国家の相互理解と協力を視野に入れた国際的な運動へと発展するはずのものであった」という<sup>29</sup>。

つまり、帰一教育は、最終的には多様性理解につながるという考え方に立ったものであった。特に成瀬はアメリカンの思想家、哲学者であるラルフ・ワルド・エマーソンの一元的思想をベースにしているという<sup>30</sup>。

エマーソンの思想をベースにしつつ、成瀬は帰一という考え方をを用いて多様性の調和を図ろうとした。「帰一」を融合の原理ではなく、多様性の調和の原理として把握したのである。成瀬の帰一思想の説明として大森は「帰一思想には、異なる宗教・人種・文明との共存・共生という考え方が内包され、自分と異なるものを有する人々を認め、尊重し、受け容れていくという寛容な精神や態度が求められる<sup>31</sup>」と述べている。さらに「帰一思想には対立や紛争を拒み、異なる宗教・文化・思想を互いに理解し、ある同一の目的の下に協力していくという発展的な力も内に有している」とし、「今後ますます世界の平和、和解、協力が求められる中で、帰一思想的発想は現代の諸問題を解決する重要な鍵を握っていると思われる」とも述べた。

ここで重要になることは、帰一を「融合」の原理ではなく、多様性の「調和」の原理とする点であろう。ここで改めて「帰一」という言葉、さらには「融合」と「調和」の言葉の意味合いをおさえておきたい。

まず、「帰一」という言葉について、渡辺英一は『『帰一』とは英語の *concordia* に相当し、固定した一つの信念・信条によって諸宗教・諸思想を統一するのではなく、各特色を異にする多数の調和を意味する』<sup>32</sup>と説明されている。

さらに成瀬自身は次の通り説明している。

「私は宗教を一つに融合することを意図しているのではない。実際、様々な特色を持った多様性や表現の多様な形態が唯一、宗教的な全体に豊かさを醸し出す。つまり、それぞれが全体の特別な部分を表すということである。それ故、あらゆる宗教を一つの形態、一つの教義に統一するのではなく、あらゆる特有の歴史、それぞれの個性、あらゆる宗教を大きな調和ある全体へともたらしたいのである。そこでは各々がふさわしい持ち場で世界の聖なる理想の大シンフォニーを奏でることができる」<sup>33</sup>

また、「融合」と「調和」について、辞書では次の通り説明がなされている<sup>34</sup>。

融合：とけあうこと。とけて一つになること。

調和：全体がほどよくつりあって、矛盾や衝突などがなく、まとまっていること。

また、そのつりあい。

つまり、成瀬がいう「帰一」とは、多様なものを一つに統一させるのではなく、多様なものの多様さを活かしつつ、矛盾や衝突などを取り除いたうえでまとめていきたいということになる。

しかし、こうしたことを実際にどのように教育に展開し得るのか、成瀬は、人の心の中から自発的に起こり得るもので、外から注的に教えることができない「信念」の重要性を説き、信念涵養の方法として次の9つを掲げた。

- (1) 人格の感化：寮監，教師，先輩が自然に及ぼす影響力を重視。
- (2) 校風の感化：向上性や自由寛大の精神，調和の精神などを重視。
- (3) 実践倫理：成瀬自身が担当し，校風養成のための支柱として位置。
- (4) 諸学科に対する態度：歴史伝記，自然的研究，理科博物館を重視。
- (5) 瞑想の時間：15分間のメディテーション。座禅，深呼吸，読書などにより集中統一。
- (6) 各種の修養的会合：お互いに意思疎通し合い，思想を理解して感情の融和を図る
- (7) 質問会：学生の胸中における懐疑，要求などを自由に打ち明けさせ，適切に指導。
- (8) 犠牲的奉仕の実行：公のために私を捨て，全体のために我が身をささげる。愛国心。
- (9) 桜楓会：卒業生の団体。卒業生の精神を絶えず喚起する場。

こうした9つの信念涵養の方法を通じて成瀬がめざしたのは、特定の宗教宗派に偏しない方法で帰一思想を醸成させることにあった。

しかしながら、大森は、帰一思想における危険性として「相対主義や融合主義」の危険性を掲げている<sup>35</sup>。具体的には、「あらゆる宗教が本質的に同じであるとする、共有性に基礎をおく見方が、各宗教の伝統の問題を軽視することにつながり、宗教混合的性格の表出により、あいまいな宗教教育になってしまうことが危惧される」としている。そして、この点に

ついでに解決策の一つとして、多元的宗教教育の方法が提案されている。

具体的には、宗教の多様性を理解し比較するために少なくとも3つ（できればそれ以上）の宗教を取り上げ学ぶ必要性を説いている。それぞれの宗教の相対的な位置や相互の関連などを十分理解したり、その中で自分自身の信仰や宗教観を明確に位置付けることができるとしている<sup>36</sup>。そして、世界的にこの多元的宗教教育というのは広く展開されているという。例えば、英国では、異なる宗教的・民族的背景をもつ子どものエスノグラフィック研究から導き出されたデータを基にカリキュラム開発を行い、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、仏教等の諸宗教を学習する宗教教科書を作成したという。生徒はこれらの学習教材の内容を自らの信仰・価値・経験と比較・対照し、建設的批判的に自らの生き方や価値を検討するという。

以上、帰一性と多様性との共存の可能性という切り口から検討をしてきた。帰一的な思想は平和への解決策の一つであることが推測されるが、一方、それは思想の均質化を生むことになり、文化の多様性が失われることになるのではないか。文化の多様性があるからこそ我々人間はその環境に適応する形で進化してきた歴史があった。こうした問題提起に対し、帰一教育に取り組んだ成瀬の思想をベースに帰一性と多様性との共存について検討した結果、次の通り整理できる。

- ・帰一教育は思想を一つにまとめることではなく、多様性を認めたくえで矛盾や衝突を取り除くバランス感を養うことにある。
- ・しかしながら、一歩間違えると、相対主義や融合主義へと導く危険性をはらんでいる。具体的には、すべての本質が同じであるとする共有性に基礎を置くことによる多様性や個性の喪失の危険性が挙げられる。
- ・こうした危険性を回避する一つとして多元的宗教教育というものが掲げられる。1つの宗教を学習するのではなく、3つ以上の宗教を学習し、自らの信仰・価値・経験と比較・対照し、建設的批判的に自らの生き方や価値を検討するという方法である。

この整理を踏まえ、改めて、本項冒頭で掲げた愛国心と多様性の共存の可能性について整理する。

道徳教育では、私たち日本人としての誇りや自覚をもち、日本という国の伝統や文化を愛することの重要性を説いている。これは一つの日本人としての思想である。一方、多国の人々や文化を大切にしたり、世界の人々と親善に努めるといった多様性を受容するという思想も掲げられている。それを上記の多元的宗教教育に擬えて整理するならば、日本のことだけを学習するのではなく、その他複数の国のことも学習し、それを自らの価値や経験と比較・対照させ、建設的批判的に検討する必要があるということになる。

さらに新たな宇宙時代、未知なる宇宙との遭遇、人間が脅威と感じ得る生命との遭遇を想定した場合、そうした「建設的批判的に」検討できる能力が十分に身に付いている必要がある



るといえるであろう。

つまり、帰一性と多様性の共存は、今の時代以上に新たな宇宙時代を迎えるに当たって欠かせない方向性となるのではないか。日本という国を愛するように、地球という一つの星を愛する、一方で、地球の中にある多様性、宇宙に広がる多様性を理解し、建設的批判的に検討できる能力をもち、そのうえで、自分たち自身の基準を規定していく、こうした行動が求められてくるのではないか。

こうした気づきを踏まえ、次項で新たな宇宙時代に向けた道德教育に対する課題を整理することとする。

#### 4. 新たな宇宙時代に向けた道徳教育における課題

これまで次の順序を踏んで、新たな宇宙時代に向けた道徳教育について検討をしてきた。

##### (1) 新たな宇宙時代がもたらす意識変化

新たな宇宙時代とは「地球以外の場所に生命が発見される」ことが事実として起こり得る時代であり、「青い地球の姿を見たことで生じた意識変化、地球は一つ、宇宙から見れば国境線はないという共通意識」を超える新たな意識変化が生ずる可能性をもつ時代である。

##### (2) 「未知なる宇宙」への心構え、畏敬の念の持続

「未知なる宇宙」は、これまでの真理が真理ではない発見をもたらす可能性や、地球外生命の発見をもたらす可能性を秘めている。SFではそうしたことへの「脅威」や「恐怖」が描写されている。こうしたことを踏まえれば、まず、「未知なる宇宙」に対し、「事実を受け容れる」「どのような異質なものを、常識では考え難いとされるものも受け容れる」心構えが求められるといえる。

しかし、こうした心構えを求めたところで、道徳教育が掲げる「人間の力を超えたものに対する畏敬の念」を継続することが可能なのであろうか。

##### (3) 「基準」を決める社会

すべてのものに畏敬の念をもつにあたり、「基準」というものがどのような価値背景の下に設定されるかは重要なことである。

今の道徳教育に関する目標は、今日の日本を取りまく「社会全体のモラルの低下への対処」への課題として掲げられたものである。

しかし掲げられた目標に沿って効果的に学習成果が果たされたときに生ずる問題として、マジョリティとマイノリティという立場が生ずることに気がつく。効果的に学習成果が果たされたものをマジョリティとした場合、確実にマイノリティが発生してしまう、さらには、宇宙時代にこれまでの常識を覆す出来事が多々起きた場合の「正しさ」というもの、さらには「基準」というものの「正しさ」をどのように判断すべきであろうか。こうしたことを踏まえて、多様な文化や価値観を知るといえることがいかに重要であるかということに気づかされる。

もちろん、多様な文化や価値観を「知る」ということについては、今の学校教育でも試みられているのも事実である。しかし、多様な文化や価値観への「適応能力をもつ」ということに関しては不十分であるといえるのではないか。

##### (4) 「愛国心」と「多様性」との共存

一方、道徳教育の目標には、日本人としての誇りや日本を愛する心をもつことの重要性が説かれ、多様な文化や価値観を受け容れるということと、日本人としての誇りや日本を愛す

る心をもつことと、どのように共存し得るのであろうかという疑問が生ずる。

この点について、「帰一性」と「多様性」という観点から検討をし、特に帰一教育について追究してきた成瀬仁蔵の活動をベースに検討をした。

その結果、①帰一教育は思想を一つにまとめることではなく、多様性を認めたくえで矛盾や衝突を取り除くバランス感を養うことにあること、②しかしそれは相対主義や融合主義へと導く危険性をはらんでいること、③その危険性を回避する一つとして、多国のことを学習し、自らの価値や経験と比較・対照させ、建設的批判的に検討する必要があることが明らかとなった。

以上の整理により、新たな宇宙時代に向けた道德教育における課題は次の3つに整理できる。

#### ①未知なる宇宙，新たな宇宙時代の理解

国際理解に関しては学校教育の中でも取り組まれているが、未知なる宇宙を多く目の当たりにする可能性のある新たな宇宙時代に向けて、これまでとはまったく異なる文化や価値観に遭遇する可能性があるということを理解させる必要がある。これは「恐怖」や「脅威」ということではなく、そもそも「人類とは何か」「宇宙の中にある人類」という人類中心主義から宇宙中心主義への転換などが求められる。これをいかに学校教育、道德教育のなかに組み込んでいくべきか、この点が1つ目の課題として挙げられる。

#### ②人類進化に必要な多様な文化への適応能力の習得

次に、未知なる宇宙を多く目の当たりにする可能性のある新たな宇宙時代に向けて、単なる国際理解に留まるのではなく、過去に我々人類の祖先がそうしてきたように多様な文化への適応能力が必要であることに気づかされた。この「理解」から、「適応」するための「適応能力」をいかに身に付けさせ得るかという課題が挙げられる。

#### ③建設的批判的検討能力の習得

帰一性と多様性の共存をめざすには、単に多様な文化を「知る」だけではなく、さらには多国の学習をするのみでは足りず、いかにして多国の文化や価値観を、自らの価値や経験と比較・対照させ得るか、さらにはそうした比較・対照によって、いかに建設的批判的に検討することができるか、こうした能力をどのようにして身に付けさせ得るかという課題が挙げられる。

上記の整理を踏まえ、改めて、今日の道德教育に立ち戻って考えてみることにする。

今日の道德教育は、「主として自分自身に関すること」「主として他の人とのかかわりに関すること」「主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の大きな4つを軸として子どもたちの発達段階に応じて実施され

ている。『学習指導要領』としては、年間 35 単位時間を要とし、学校の教育活動全体を通して実施することになっているが、実際の教育活動は理想からは遠いようである。新たな『学習指導要領』改訂は 2011 年 4 月に施行されたばかりでまだ実践報告はないが、改訂に当たっての議論の中で、次のような課題が挙げられていた<sup>37</sup>。

- ・ 道徳の時間については、その指導が形式化して実効が上がっていないとの指摘や、学年が上がるにつれて児童生徒の受け止めがよくないとの声がある。
- ・ 学校や学年の段階等を踏まえた道徳教育の重点が見えにくく、教育活動全体を通じた指導や、道徳の時間を含めた相互の関連が十分でない、教師が理解しにくいものや指導しにくい内容があるとの指摘がある。

道徳教育を「指導する」という観点から見ると、教材や授業内容は抽象的なものになりがちであることが想定され得る。例えば、道徳教育の教材の一つとして「心のノート」があるが、その内容は「自由ってなんだろう」「よりそうこと、わかり合うことから」「生きているんだね自然とともに」<sup>38</sup>など、大人でもこれを題材に考えさせればかなり議論できそうな極めて抽象的な内容となっている。これを指導する側は、各テーマについて具体的にどのように深掘りさせるかを相当に検討する必要がある、さらには、単に「知る」だけでなく、「理解」させ、さらに「適応能力」や「検討能力」へと導くには、十分練られた授業を展開する必要がある。年間 35 単位時間では到底成し得ないことであり、この点を、他の教育活動とどのように結び付けるかは考えていく必要がある。

この点を考えるうえで、そもそも道徳性の発達を考えたコールバーグの認知発達のアプローチ (cognitive developmental approach) における検討が欠かせない。コールバーグによれば、道徳性の発達とは認知構造の変化であり、道徳規範は、単に受動的に内面化されるのではなく、自分の認知構造に合うように同化されるとしている。さらに、認知発達の変化は、個人と社会環境との相互作用により引き起こされる不均衡が均衡化される過程であるとされ<sup>39</sup>、このためには子ども同士の平等な立場でのモラル・ディスカッションを重視するといふ。

なお、ここでいう「内面化」とは、その社会が有する価値と規範を、自分の価値と規範として、受け容れることを指す<sup>40</sup>。また、「同化」とは、知識などを取り込んで、完全に自分のものにするを指す<sup>41</sup>。

こうした過程があることを踏まえれば、まず重要なことは、多様な文化や価値観を子どもたちの認知構造に合うように同化させるためのプロセスを検討することであり、さらにその同化を促進させるスキルとして「建設的批判的検討能力」を身に付けさせることが重要なのではない。

この点で参考になるのが、構成主義の考え方である。それによれば、認知機能の発達は、他者とのやりとりを通じ、自分とは異なる考えから生ずる葛藤を解消するために、やりとり

をしている個人が、そのやりとりに積極的に関わり、自己省察（自分とは異なる他者の考えを聞く、双方の考えを比較・検討することで自分の考えを捉え直す）をしていく中で、それらの考えを整合性のあるものに統合し、自己のものとして内面化していく過程とされている（Tomasello, kruger, &Ratner, 1993）<sup>42</sup>。

つまり、「建設的批判的検討能力」を身に付けさせるには、繰り返しの他者とのディスカッションが欠かせないということである。そのうえで、それを他人事ではなく自分事にさせるためには、自己省察が欠かせないのである。そうした段階を重ねることで、多様な文化や価値観への適応能力が身に付くことが考えられる。つまり、次の流れでの実践取り組みが必要なのではないかと考えるのである。

**(a)多様な文化や価値観を子どもたちの認知構造に合うように同化させる**

⇒「未知なる宇宙」「新たな宇宙時代」に対する新たな価値について、道徳授業の中でのみで完結するのではなく、子どもたちの日常生活、学校生活の延長上で実践すべきであり、かつ、子どもたちの発達段階に合わせて学校教育全体のカリキュラムの中に組み込むことが重要である。

**(b)建設的批判的検討能力を身に付けさせる**

⇒繰り返し他者とディスカッションする場を設けることで、建設的批判的に検討するスキルを身に付けさせることが重要である。

**(c)自己省察のスキルを身に付けさせる**

⇒建設的批判的に検討し、それを他人事ではなく自分事にするために、自己省察により自己自身の体験や価値と照らし合わせて検討するスキルを身に付けさせることが重要である。

**(d)多様な文化や価値観への適応能力醸成へ**

⇒(a)～(c)を繰り返し実践し、適応能力として身に付けさせるまでに醸成する必要がある。

以上、新たな宇宙時代に向けた道徳教育における課題について、特に取り組むべき課題と実践という観点から段階的に整理した。

## 5. おわりに

本論文では、新たな宇宙時代に向けた道德教育に対する課題について追究してきた。

前章の最後に掲げた課題には、いずれもこれまでの学校教育における課題として繰り返し議論されてきた内容が見受けられる。

しかし、繰り返し議論されているにもかかわらず、いずれも「知る」段階のレベルまでに留まり、「内面化」「同化」させるところまで踏み込んだ実践というのは未だに見られない。

確かに、社会が有する価値と規範を自分の価値と規範として受け容れる「内面化」や、知識などを取り込んで完全に自分のものにする「同化」は容易なことではないことは想像し得る。しかし、この実現こそが新たな宇宙時代に向けて必須なのではないか。

それではこうした実践をどのように進めていけばよいのであろうか。それには学校教育全体のカリキュラム設計の検討、FD (Faculty Development) としての学校教員への教育のあり方の検討など、様々な観点からの検討が求められるであろう。本論文では、あくまでも現状の『学習指導要領 (道德教育)』を題材に、新たな宇宙時代に向けた課題を検討したに過ぎない。今後、前章で掲げた実践を具体的にどのようにすれば実現し得るのか、追究していきたいと考えている。

最後に、本論文では新たな宇宙時代に向けてどのように価値教育をしていくべきか、特に道德教育における課題を追究してきたが、その結果、宇宙を教育に活かして実践する「宇宙教育」のあり方をも問われる課題が抽出されたことに気づかされる。

筆者も含め、我々JAXAでは、積極的に「宇宙教育」を展開している。しかし「宇宙教育」を展開するに当たり、子どもたちに、単に宇宙を知ってもらったり、宇宙に対して興味をもってもらったりということを目的に展開されるのでは不十分であることに気づかされる。なぜなら、我々外部の立場が学校教育に関わる意義は、学校教員の力だけでは解決し得ない課題を、支援することにあるからである。例えば、文部科学省が2001年頃から積極的に推進しているキャリア教育は、子どもたちに対し、「世の中の実態」や「働くということの意義」など、実際に数年後にエントリーする社会に、小学校のうちから触れさせることで学校生活と職業生活との接続を円滑にしようという試みである。しかし、こうした試みを学校の中の閉じられた環境で限られた教員のみで実施するのは困難である。そのために産業界が学校に人材派遣をするなどの交流が図られている。これと同様に、JAXAが「宇宙教育」に携わる意義として、学校という閉じられた環境、限られた教員のみでは実現できないことをサポートする必要があり、特に、新たな宇宙時代に向けて取り組むべき課題としては、宇宙を専門に研究している我々JAXAの寄与は欠かせないことが考えられるのである。

単に「宇宙を知る」「宇宙に興味をもってもらおう」ということに留めるのではなく、新たな宇宙時代に向けた子どもたちに対する価値形成につながる宇宙教育であることが望まれるのではないか。さらには、新たな宇宙時代に向けてもつべき能力やスキルを身に付けさせる宇宙教育であることが望まれるのではないか。宇宙という題材をベースに我々人類の在り方を考えさせる、さらには、人類として生きていくための術を身に付けさせる、そのような

教育へと展開させることが宇宙教育に携わる者としての使命なのではないか。

こうした気づきも踏まえ、今後、宇宙教育の在り方についても検討していきたいと考えている。

**【謝辞】**

今回の論文を執筆するに当たり、2011年6月に開催した沖縄でのパネルディスカッション「宇宙時代の人間・社会・文化」での経験は、なくてはならないものでした。このパネルディスカッション開催に至るまでに、特に、京都大学宇宙総合学研究ユニット特任講師の磯部洋明先生には、私の思考を構築するのに大きな貢献をしていただきました。さらに京都大学教授の鎌田先生、神戸大学教授の岡田先生には、帰一性や多様性など、論点構築のご指導を賜りました。これらの先生方に心より感謝申し上げます。

また、ジャーナリストの立花隆さんとの出会いも大きく、宇宙のことについて何の知識もなく素養もない私に対し、叱咤激励を下さったほか、様々な知見を惜しみなく出してくださいました。本当にありがとうございました。

さらに、論文執筆にあたり、時に上司の立場として、時に研究者の立場として、温かく丁寧にご指導くださった JAXA 宇宙科学研究所教授の安部隆士先生、そして私の教育学の指導教員である東北大学大学院教育学研究科教授の水原克敏先生には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

**【引用文献】**

- <sup>1</sup> 三省堂『大辞林』
- <sup>2</sup> 「教育基本法」(平成十八年十二月二十二日法律第二十号)
- <sup>3</sup> 文部科学省『学習指導要領 道徳編』2008/8
- <sup>4</sup> 文部科学省『学習指導要領解説 道徳編』2008/6
- <sup>5</sup> 同上, P. 15
- <sup>6</sup> 同上
- <sup>7</sup> 同上, P. 16
- <sup>8</sup> 文部科学省『学習指導要領 道徳編』2008/8
- <sup>9</sup> 文部科学省『学習指導要領 道徳編』2008/8
- <sup>10</sup> 立花隆『宇宙からの帰還』中公文庫, 1985/7, PP. 146-147
- <sup>11</sup> 同上, P. 247
- <sup>12</sup> 同上, P. 256
- <sup>13</sup> 同上, P. 275
- <sup>14</sup> American Film Institute, <http://www.afi.com/10top10/category.aspx?cat=7>
- <sup>15</sup> 田村元秀(文:川端裕人) NATIONAL GEOGRAPHIC(日本版)  
<http://nng.nikkeibp.co.jp/nng/article/20110916/284269/>
- <sup>16</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』2009/6
- <sup>17</sup> 同上, PP. 19-20
- <sup>18</sup> 三省堂『大辞林』
- <sup>19</sup> アルノ・グリューン(著), Arno Gruen(原著), 馬場 謙一(翻訳), 正路 妙子(翻訳)『「正常さ」という病い』青土社, 2001/4
- <sup>20</sup> 泉谷閑示『現代人に突きつけられた「うつ」というメッセージを読み解く』ダイヤモンドオンライン, 2010/3
- <sup>21</sup> 内山純蔵「第4章 文化の多様性は必要か?」日高敏隆編『生物多様性はなぜ大切か?』地球研叢書 昭和堂, 2005, PP. 97-138
- <sup>22</sup> 寺倉憲一「9 持続可能な社会を支える文化多様性—国際的動向を中心に—」『持続可能な社会の構築 総合調査報告書』国立国会図書館, 2010/3, PP. 221-222
- <sup>23</sup> 文部科学省中央教育審議会『「中央教育審議会 スポーツ・青少年分科会 青少年の体験活動の推進の在り方に関する部会」これまでの意見のまとめ』2011/9
- <sup>24</sup> 文部科学省「第2章学校における国際理解教育」「第3章地域・海外とのつながりを生かした国際理解教育」『国際理解教育実践事例集』教育出版株式会社, 2008/8



- <sup>25</sup> 水原克敏『学習指導要領は国民形成の設計書—その能力観と人間像の歴史的変遷—』東北大学出版会, 2010/6, PP. 55-56
- <sup>26</sup> 同上, P. 94
- <sup>27</sup> 大森秀子『多元的宗教教育の成立過程—アメリカ教育と成瀬仁蔵の「帰一」の教育—』東信堂, 2009/1
- <sup>28</sup> 同上, P. 216
- <sup>29</sup> 同上, P. 219
- <sup>30</sup> 同上, P. 236
- <sup>31</sup> 同上, P. 262
- <sup>32</sup> 渡辺英一『「帰一の眞意」(1)』『桜楓新報』第34号, 1951/8, P. 3
- <sup>33</sup> 大森秀子『多元的宗教教育の成立過程—アメリカ教育と成瀬仁蔵の「帰一」の教育—』東信堂, 2009/1, P. 241
- <sup>34</sup> 三省堂『大辞林』
- <sup>35</sup> 大森秀子『多元的宗教教育の成立過程—アメリカ教育と成瀬仁蔵の「帰一」の教育—』東信堂, 2009/1, P. 263
- <sup>36</sup> 同上, PP. 263-265
- <sup>37</sup> 文部科学省-中央教育審議会-初等中等教育分科会-教育課程部会-豊かな心をはぐくむ教育の在り方に関する専門部会『第10回議事録』「資料7」
- <sup>38</sup> 文部科学省『心のノート 小学5・6年』
- <sup>39</sup> 荒木紀幸(編著)『道徳教育はこうすればおもしろい: コールバーグ理論とその実践』北大路書房, 1988/8
- <sup>40</sup> 中島義明(編集), 子安増生(編集), 繁榊算男(編集), 箱田裕司(編集), 安藤清志(編集), 坂野雄二(編集), 立花政夫(編集)『心理学辞典』有斐閣, 1999/01
- <sup>41</sup> 三省堂『大辞林』
- <sup>42</sup> 奈田哲也, 丸野俊一「他者との協同構成によって獲得された知はいかに安定しているか」『発達心理学研究』発達心理学研究 22(2), PP. 120-129, 2011-06-20 日本発達心理学会

## 論文講評

水原 克敏 東北大学大学院教育学研究科 教授

本論文は、新たな宇宙時代の到来に向けて、道德教育はいかにあるべきか、という課題について追究したものである。従来の宇宙教育は、宇宙に関する知識や認識を広げることが目的として、未知の世界を調査研究させることが主たる狙いとされてきた。しかし本論文は、そのような宇宙教育では限界があると捉え、「宇宙という題材をベースに我々人類の在り方を考えさせる」など、道德的価値観の教育にまで深めることが必要であると論じる。

伝統的な道德教育では、「自然に対する畏敬の念」を育成すべきことがよく強調されるが、地球の自然を想定するだけでは、「畏敬の念」はそう簡単には育成されそうにない。なぜなら我々の心の奥底に、人類の能力によって地球を支配できるし、環境の改善もいずれできるという思い上がりがあるからに相違ない。

だが、いったん宇宙に目を転じるならどうであろう。数えきれないほどの恒星と惑星が何億光年にもわたって、一定の秩序のもとに自転・公転し、消滅と再生を繰り返すという、宇宙の壮大な摂理に圧倒されてしまうことになる。こうした宇宙の事実と直面させることで、人は、より深く人類の在り方を考えることができる、また、そうすべきである、ということが本論文によって教えられる。

このような意義のある本論文を世界に向けて発信すべきであると考えます。